

1 1	海部	弥富市立桜小学校	カトウ ミズキ 名前 加藤 瑞樹
分科会番号	1 2 a	1 2 - 1	自治的諸活動と生活指導 小学校

#### 研究題目

豊かな心を育み、よりよい生活を目指す児童の育成  
 -児童が危険を予測し、回避する能力を育てる活動を通して-

#### 研究要項

##### 1 主題設定の理由

文部科学省発行の「第3次学校安全の推進に関する計画」では、安全教育において、児童生徒等がいかなる状況下でも自らの命を守り抜き、安全で安心な生活や社会を実現するために主体的に行動する態度を育成することや、児童生徒等が危険を予測し、回避する能力を育成することが重要であると述べられている。さらに、児童生徒は守られるべき対象であることにとどまらず、学校教育全体を通して、自ら安全で安心な社会づくりに参加し、貢献できるようになることが求められている。

令和5年度末に行った学校づくりアンケートでは、96.3%の児童が「学校で地震や火事が起きたとき、どうすればよいかわかります」と答え、定期的に行っている避難訓練の成果が表れた結果となった。令和6年度4月に行った避難訓練でも、同じ教室にいる教師の指示に静かに従い、運動場までの避難を整然と行うことができた。しかし、予告なしの休み時間の避難訓練では、身の守り方や避難経路等どう行動するべきかが分からない児童の姿が見られた。事故や災害はいつどこで起こるか分からないため、安全教育での学習内容を自分事として捉えさせるための深い学びと、リスクマネジメントができる資質・能力の育成がさらに必要であると考えた。

本校では、昨年度から安全教育を推進するために研究に取り組んできた。まず、年間計画を作成し、安全教育の基盤の確立に向けて、教育活動全体を通じたカリキュラム・マネジメントに取り組み、授業実践を行った。また、廊下の掲示板を活用し、各学年の安全教育の学びを他学年にも伝えられるよう、学習内容を掲示した。一年目の課題として挙げられたのが、単元ごとのつながりをもたせることができず、リスクマネジメントにまで至らなかったことである。身近な危険や事故を予測する力を身に付けさせ、実際に安全に主体的に行動することができるようにするために、さらに学習内容を自分事として捉えさせる必要がある。

そこで、今年度は昨年度の年間計画を再考し、より自分事として捉えられるような授業実践を行いたいと考えた。そのために、出前授業による専門的な知見からの学びの場を設定したり、自分が得た知識や技能を他者に伝えたりする活動を通してより深く学び、実践的な力としてリスクマネジメントの力を身に付けさせ、自他の安全及び生命を大切に、よりよい生活を目指す児童を育成したい。

##### 2 研究のねらい

###### (1) 目指す児童像

日常生活のさまざまな場面において、安全に行動するための状況判断の仕方や、事故や災害が起こる原因を他者との関わりを通して理解し、安全を意識して危険を回避することができる児童

(2) 研究の仮説

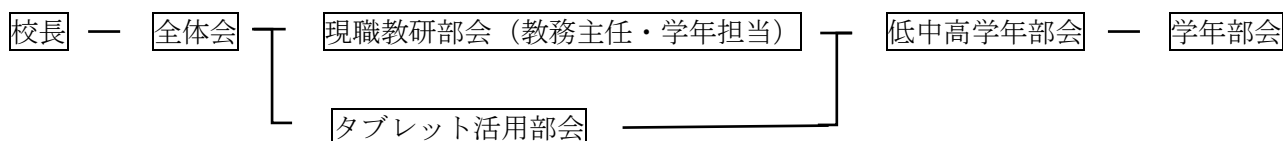
【仮説 1】 年間計画を見直し、発達段階に合わせて計画した安全教育に年間を通して取り組むことで、児童がより広い視野で危険を予測して、適切に行動する能力が身に付くであろう。

【仮説 2】 自分の学びを他者と共有することで、安全に関する学びを深めることにつながり、自分事として捉え、より主体的に行動できる児童を育成することができるであろう。

3 研究の対象

全校児童 (359 名)

4 研究の組織



5 研究の方法

(1) 仮説に対する手だて

【仮説 1】

より確かな知識や技能として学習内容を定着させるために、安全教育の年間計画を見直し、単元や授業の流れを工夫することで、学習内容につながりをもたせる。

【仮説 2】

出前授業の講師から専門的な知識を得る機会を設けたり、クラスの仲間と考えや意見を交流したり、異学年が学習した内容や考え、意見を共有し合ったりする協働的な場を設定する。

(2) 仮説の検証

① アンケート調査

② 授業記録 (活動時の児童の様子、活動後の児童の記述)

6 研究の実践

(1) 2年生の実践 学級活動・生活科「桜小学校のまわりのあんぜんについて知ろう」 (9時間完了)

① 単元の目標

校区の町探検を行い、町の安全について気付いたことを友達と伝え合い、地図に書き表す活動を通して、自分の町の安全に関心をもつことができるようにする。

町の安全について気付いたことを1年生に伝えることで、自らの防災意識を高め、安全に行動することの大切さを理解できるようにする。

② 実践内容

低学年では、昨年度に引き続き「災害時に安全な行動をとることができる」を目標に、より学校のルールや交通安全、災害時の身の守り方についての知識や技能を身に付けられるよう、年間計画を再考した。児童が安全に対する思いや願いをもち、それを他者に伝えることで、より安全に過ごそうという気持ちが高まると考え、意識して活動させた。

2年生は、生活科「とび出せ！町のたんけんたい」で校区探検を行った【写真1】。学校に戻り「大きな鏡があったよ」「いろいろ



【写真1】 校区探検をする様子

な場所に看板が立っていたよ」と見つけたものを意欲的に探検カードに書く様子が見られた。探検カードは、学級で発表し合い、大きく拡大した白地図に貼り付け、校区の探検マップを制作した【写真2】。その中で、「歩道が狭くて危なかったよ」「車にぶつかりそうな場所があったよ」という気付きがあった。



【写真2 探検マップを制作する様子】

そこで、校区内で気を付けるとよいことや安全についての工夫を1年生に伝える活動を特別活動として設定したところ、「横断歩道は、道路に飛び出さないで安全に道を渡ってほしいから」「110番の家は、あぶない目にあった時に助けてもらえるから」などの意見が出て、1年生に安全に過ごしてもらいたいという願いが感じられた。学級の垣根を越えてグループを作り、話し合いの場を設定することで、よりさまざまな意見を交流させることができた。



【写真3 ICT機器を活用して1年生に説明する様子】

1年生に伝える活動は、小グループに分かれて2年生が主体的に活動できるようにした。2年生の児童が、町探検の時に撮った写真をタブレットで映し、指し示しながら、ペアの児童らに説明をした【写真3】。1年生の反応は「津波のときの避難場所を初めて知った」「学校の周りには危険な所もあったけど、安全に過ごすための工夫がたくさんあった」「2年生の発表を聞いて安全に過ごそうと思った」と校区の安全に対する知識や防災に対する意識を高めることができた。

2年生の活動後のアンケートでは、多くの児童が、以前より安全に気を付けて過ごそうという気持ちになったと答えた。「これからは、カーブミラーがあるところは、車が来ないかよく確認して歩こうと思った」「安全に気を付けて生活したいと思った」と安全を意識して生活するだけでなく、自分から危険を予測して回避しようという思いをもたせることができた。

(2) 3・4年生 学級活動「非常用持ち出し袋をつくろう」(3年生1時間完了 4年生4時間完了)

① 単元の見直し

災害に備えて、非常用持ち出し袋の中身についてクラスで話し合い、自分に合わせた持ち出し袋の中身を考えることで、防災意識を高めることができる。(3年生)

家族や友達と話し合い、自分の家や普段利用している場所から避難するときの安全な避難経路を設定した上で、安全に移動できる量の持ち出し袋の中身を考えることで、防災意識を高めることができる。(4年生)

② 実践内容

中学年の年間計画では、災害時には、自分の身を守る行動をとるだけでなく、家族や友達、周囲の人々と協力して危険を回避することができるようにカリキュラムを編成した。昨年度は児童だけの学習内容だったが、今年度は、3年生が授業参観で保護者と一緒に持ち出し袋の中身について話し合いながら、他の児童の意見も聞くことでさらに考えを深める活動を行った。初めのうちは、どの家庭でも必要になりそうなものを選んでいく児童が多かったが、話し合う中で徐々に自分の家族の事情を考えた意見や、プリントに載せられていないが自分が必要だと思うものについての意見が出るようになった。さらに振り返りの活動では、定期的に持ち出し袋の中身を見直して、入れ替える必要があることに気付く児童の記述も見られた

【資料1】。

4年生では、第1時で東邦ガス

兄ちゃんやあしたしが、小さなおきにじゅん びしえたので、いまぎねないふ、く があると思うので、家にかみたらかまくらにしてあたら しくしようと思いまねさうが、いについて考えよう と書いてまね	【資料1 児童の振り返り】
--	---------------

から講師をお招きし、弥富市のハザードマップや市内の危険な場所についての授業を行った。高潮と津波の違いや地震の仕組み、堤防が決壊したときの被害想定などのハザードマップの見方を知るだけでなく、市内の危険な場所を実際の写真で見ながら学ぶことができ、児童がハザードマップについて知るよい機会となった【写真4】。



【写真4 市内の危険な場所を見る様子】

第2時では、授業参観で避難マップ作りを行った。桜小学校区の白地図を用意し、自宅から最寄りの避難所までの避難経路を保護者と一緒に考えた。事前に児童がタブレット端末を家庭に持ち帰り、保護者と一緒に危険な場所や安全対策が施されている場所を撮影していたため、親子でどこが危険か、どう避難すれば安全かを話し合いながら確認することができた。大人の視点からは見えにくい危険を児童が教えている場面も見られ、学校だけでなく家族の視点を入れた防災について考えることができた。

第3・4時では、持ち出し袋を持って第2時で考えた避難経路で避難するために自分が持ち出すことができる中身は何かを考えさせた。必要最低限の水や食料が入った実際の持ち出し袋を背負わせ、重さを実感させた上で、追加で必要だと思うものをグループで考えさせた。簡易トイレや衣服など自分たちの生活に関わるものを考える児童が多い中、家族の写真などを挙げる児童もいた。「はぐれてしまったときなどに周りの人に写真を見せて聞く」という理由を聞いて、新たな気付きを得ている様子も見られた。互いに質問しながら持ち出し袋の中身を考えることで本当に必要なものの優先度や必要な理由を再考することができた。振り返りでは、「避難するときに持ち出せるものには限りがあるので、家でよく考えて準備をしないといけないと思った」と家でも実際に持ち出し袋の準備をしようとする児童の姿が多く見られた。

### (3) 6年生 特別活動 避難生活についてかんがえよう～避難所運営ゲーム「HUG」～（3時間完了）

#### ① 単元の目標

災害時に、自分だけでなく家族や友達、周囲の人々の安全にも配慮し、他の人の役に立つことを判断することができる。

#### ② 実践内容

高学年では、災害時には家族や友達、周囲の人々の安全にも配慮し、他の人の役に立つ行動ができるようカリキュラムを編成した。実際避難するとなったら、避難所でどのようなことが起きるか考えるために、自分たちが避難所の運営側にたって、次々来る人を体育館や中庭に誘導するHUGゲームを授業参観で行った。

体育館と中庭の拡大図を机の上に置き、順番に来る人をどこに配置するかをグループで考え、一度配置したら動かさないというルールを伝えた後、保護者も話し合いに入ってもらった。

けがをしている人は、受付や出口、トイレの近くに配置したり、国籍や性別や家族構成で似ている人は近くにしたりと、考えながら配置していた。また、元気な人は、できるだけ手伝ってもらえるよう、助けが必要な人の近くに配置し、実際の様子を想像しながら考えていた。児童だけで考えているときは、できるだけ全員の要求を受け入れようとしていたが、保護者から「無理な場合は、断ってもいいんだよ」とアドバイスもらった班は、「ペットは入れません」「テントは張れません」と断り、配置をしていた。グループで話し合う中で意見が分かされると、決断できな



いときもあった【写真5】。実際に運営するときも、いろいろな考え方があることに気付くことができていた。同じ条件でスタートしたが、グループごとに発表したときには、他のグループと自分たちのグループを比較し、なぜその配置にしたのか、それぞれの説明を聞くことで、避難所運営から実際の避難生活を想起するきっかけとすることができた。振り返りでは、「避難する人の状況によって場所を変える必要があることが分かった」「避難所の場所は限られているので譲り合うことがとても大切で、普段の訓練も重要だと分かった」と自分だけでなく周りの人々にも気を配る様子が見られた。



【写真5 親子で避難者の配置を  
考えている様子】

授業参観後、家庭で自分の家の防災対策を調べたり、災害時の避難について家族で再確認したりする家庭が多く見られた。家庭でも防災について考えるきっかけとなった。

#### (4) 全学年 特別活動 オンライン防災集会「あなたなら、どうする？」(1時間完了)

##### ① 単元の目標

異学年と通学中の安全な行動について考えることで、通学における危険を予測したり、状況を判断したりする、リスクマネジメントについて考えることができる。

##### ② 実践内容

全学年を対象に、児童会が中心となってオンライン防災集会を開いた。本集会は、登下校をともにしている通学班ごとに教室に集まり、オンラインで行った。児童は、普段同じ仲間と登下校をしているが、安全について一緒に考える機会は少ない。そこで、その仲間と登下校の安全について考えを交流し、自分たちの身を守るためにはどうしたらよいのかを考える場を設定した。



【写真6 班で話し合う様子】

まず、この集会では、下校中に普段は起きないことが起きたときどうすればよいのかを通学班で考えることが児童会から伝えられた。「あなたなら、どうする？」と名付けられ、出題内容は、「学校から家に帰る途中(ちょうど学校と家の真ん中辺り)、地震が起きました。電線が大きく揺れていて、歩いている人のほとんどが揺れを感じています。あなたならどうしますか」といったものである。その後、通学班の仲間と①「学校にもどる」②「家に帰る」③「大きな声で叫ぶ」④「近くの建物に入る」⑤「その場で待つ」の5択の中から一つを選び、ワークシートにその番号と理由を記入することが伝えられた。話し合いでは、高学年が中心となり、下級生の意見を引き出しながら、一生懸命話し合う様子が見られた【写真6】。多くの班は④「近くの建物に入る」を選んでおり、「学校に戻るよりも、近くの建物に入ったほうが早くて安全。建物の中には机があるだろうから、隠れることで頭を守ることができる」「自分たちの通学班で考えると、その辺りには3階建ての店があり、大人もいるから、その店に入ったほうがよい」などの意見が上がった。次に多かったのは⑤「その場で待つ」で、「その場で待って、すぐにシェイクアウトの姿勢をとり、揺れが収まるのを待つ」「揺れていると歩けないから、何も倒れてこないところで待つ」といった意見が出された。これらのことから、異学年集団である通学班で話し合うことで、自分たちの通学路を振り返り、自分たちの通学班にとって安全な行動は何かを考えるなど、自分事として安全を意識しようとしている姿が見られた。また、校内の避難訓練で行っているシェイクアウトの姿

勢をとろうと考えるなど、これまで学んできたことを仲間と再確認することで、安全について学びを深めることができた。

次に、いくつかの代表の班が通学班ごとに話し合った意見や理由を全体場で発表した。発表を聞くことで、自分たちの班の意見や理由との共通点や相違点を見つけることができ、多くの視点からより深く、登下校の安全について学ぶことができた。

振り返りでは、「みんな災害から命を守りたいという気持ちは同じなのに、選んだ行動は違うことに気付いた」「登下校で災害が起きた時に、どう行動すればよいかよく分かった。パターンは一つだけではないから、状況次第で判断して行動できるようにしたい」という意見が出され、安全に登下校する気持ちが高まったと考えられる。

## 7 成果と課題

### (1) 研究の成果

#### ① 年間計画の見直し

昨年度作成した安全教育の年間計画を見直し、指導内容を検討したことで、教育活動全体で安全教育指導を行うことができた。出前授業等を積極的に活用し、外部講師や専門家の方をお招きすることで、児童がより安全についての確かな知識を得ることができた。特に高学年では、災害が起きる仕組みなどを知ることで、災害時の適切な行動についてより具体的なリスクマネジメントができるようになった。このように、年間計画に出前授業等を適宜組みこみ、体験や実習する場を設定することで、学習内容につながりをもたせて自分事として捉えやすくなり、安全な行動について考えやすくすることができた。

#### ② クラスや異学年との意見を交流したり共有したりする場の設定

考えを伝え合う活動を積極的に取り入れたことで、他者の考えのよさに気付いたり、他者の考えから新たな気付きを得たりすることができた。防災集会のアンケートでは、「登下校中に地震が起きてもどのように行動すればよいのか分かりましたか」という質問に対して、「そう思う」と答えた児童は、5月に行ったアンケートの56%から94.8%となったことから、異学年で考えることで多くの児童がどのように行動すればよいのかを理解できたと考えられる。また、「同じ通学班の同じ学年ではない仲間と話し合っ、仲間の意見のよさに気付くことができた」という質問に対して「そう思う」と答えた児童は94.8%であったことから、ほとんどの児童が他学年の児童と話し合うことで、多角的に安全な行動について考えることができたといえる。

以上のことから、安全教育の年間計画を見直し、自分の学びを他者と交流、共有させることで、安全に関する学びを深めさせることができた。また、異学年交流を通して、より主体的に行動できる児童を育成することができたといえる。

### (2) 今後の課題

家庭や地域の専門家の方を交えながら、安全教育に取り組むことができた一方、まだ起こっていない災害について考えさせるため、いかに自分事として捉えさせるのか、今後もさらに教材研究に取り組む必要がある。また、地域の専門家だけでなく、地域の方々との交通安全や防災についての交流学习を行うことで、地元に着目をもって安全な生活を送ることができる児童の育成を目指していきたい。